王たちの宴　　Fourth　盗賊王編

スギ花粉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
王たちの宴　Ｆｏｕｒｔｈ　盗賊王編

【Ｎコード】
Ｎ０２７４Ｋ

【作者名】
スギ花粉

【あらすじ】
これは一人の盗賊と、ある問題を抱えた一人の青年の物語。彼らは出会いどのような決断を下していくのか。一応こちらだけ読んでも話は通じるようになってます。今までの神王編や北の王編とは少し違うかな？

プロローグ（前書き）

え～～スギ花粉です。楽しんでいただけたら幸いです。

プロローグ

「母ちゃん！！死んじゃやだよ！！」

え～～ん、え～～んと一人の子供が泣き叫んでいる

「メリル…仕方ないのよ。人はいつか死ぬの。それが少し早かっただけ」

「やだやだやだやだやだやだ・・・略・・・・・」

「・・ハァ・・ギガン族のラグナーが・・よくして下さるそうよ・・だから大丈夫。それに、ギガン族とは違い・・・・・将来・・あなたはこの大砂漠から出ることもできるのよ」

「やだやだやだやだ・・・母ちゃんがいなくなるなんて、我慢できない！！」

とその子供は頭を振り続けている

それをあやすように、その女性はやさしく語りかける。

「いい？メリル・・・私のいう通りにしなさい」

「うん・・分かった・・・絶対守る」

その少女はグスっと泣きながら、聞いている

「そう・・・申し訳ないわ・・・母親らしい事なんて何もできなく

て」

「そんな事ないよ！！母ちゃんに教わった事は、すご～～く役立ってるよ！！」

だが、頭をフルフルと悲しそうに揺らす

「・・・いい？・・メリル。私はお前に普通の女の子として生きて欲しいの・・・だからゲホゴホ」

「分かった！！母ちゃんの言う通りにして、間違った事なんてなかったから！！絶対守るよ！！」

それを聞き、嬉しそうに微笑む女性。

「・・そう・・ごめんね・・メリル・・幸せに・・なっ」

とそこで言葉が途切れる。そのままベットで眠り続ける女性。

「母ちゃん！！母ちゃん！！」

とぐらぐらっと揺らすがまったく反応を示さない。

うわぁぁぁぁぁぁぁぁんと、少女の慟哭が響き渡った

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝　　　　　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝

ギガン族の者が穴を掘り、墓を作ってくれた

その墓の前でメリルと呼ばれた少女は、うずくまっている

そこに白い髭を生やした、赤黒い肌をした者が話かけてくる。

「メリル・・お前のお母さんは我らギガン族のためによくしてくれた。反対する者もいるが、安心しなさい。このラグナーが、責任を持って面倒を見よう。メリルもお母さんの言ったことをしっかり守るんだよ」

それを聞き。墓を見つめながらゆっくりと立ち上がる少女。

「うん・・・俺っちは、母ちゃんの言いつけをしっかり守るよ!!」

「そうか・・メリルは強い子だな」

とラグナーは、わしわしっとその少女の頭をなでる。

「うん!!俺っちは普通の女として生きる!!

――――――――絶対なるよ!!

――――――――普通の

――――――――立派な――――――――――――――――――――女盗賊に!!」

プロローグ（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・意見待ってます。励みになるので

依頼（前書き）

え～～スギ花粉です。楽しんでいただけてるでしょうか？ではどうぞ～～

依頼

この大陸には多くの種族が暮らしている。大陸の北西のルードンの森には、ひっそりと暮らしているエルフ族が。

そして大陸の東部には多くの魔族たちが暮らしている。ドワーフ達は大陸中で鉱山を探しあてたり、鉄をうつ事に精をだしている。

強力な魔獣などはドルーン山脈を根城にしている事が多いが、稀に他の地域に生息しているものもいる。

人間族の国は、大国が現在大陸に二つ。神聖帝国を滅ぼし、首都をトーランにおく。スタットック王国。現在の国王は、第８７代北の王…ソロス・スタットックである。

もうひとつの国は、西の果てに位置する大国・ドラグーン王国である。神聖帝国と長年にわたり闘い続けてきたこの国は、今継承権争いの真っただ中にある。

そして……大陸の南には、広大な砂漠が広がっている。灼熱の大地…永遠に続くともいえるような砂の大地。

そんな場所でも、古来よりそこで暮らしている者たちもいる。ギガン族。

彼らは独自の文化・慣習を持ち、あまり他の種族と交流を持たない。昔はこの砂漠に住んでいたのは、この環境に適合するかのように創られたギガン族だけだった。だが、長い年月がたつうちに人間族や

魔族も少しづつこの砂漠に街などを作るようになっていた。
そして……その街で今一人の男がとある人物に詰め寄られている
「おい！！お前だよ！！」
「え？あ、俺？」
「そうだ！！お前…さっきから俺っちの事をジロジロと見てただろ？あん？」
と褐色の肌に、珍しい黒髪を後ろで縛りポニーテールのようにし、バンダナらしきものを頭に巻いている女性がギロッと睨みを利かせてくる
男は気恥ずかしい思いになる。確かに自分はこの人物を凝視していた。
「俺っちに用があんのか？え？」
とぐいぐいっとさらに詰め寄られる。身長も１７０ぐらいだろうか…女性にしてはスラッとした印象を受ける
「いや…あの…その」
そう自分はこの人物を凝視していた。だが、その理由をなぜ言えるだろうか？スタイルがよかったから目を奪われていたなど…
「ご、ごめんなさい！！」

と男は走り出してしまう。

「おい！！……チ……何だってんだ」

とその女性はぶつぶつ言いながら、路地裏へとはいっていく

この砂漠の街の家はみな石造りの家で、全部が四角い。それがいくつも連らなって街ができているのだ。

その細い道をするするっと進んでいくと、つきあたりにまるで隠れているかのような酒場かあった。その扉には明らかに準備中の文字がある。

だが・・…バンっとその人物は扉を壊しかねない勢いで開ける

「おう！！俺っちが来たぜい！！」

と、ずんずんと店の中へとはいっていく。それを店主はため息を吐きながら見つめる。

「はぁ〜〜メリル。何度もいうが…もっと静かに入ってこい。扉が壊れちまう」

「キキキキ……扉の修理代は先に出してるじゃねーか。つまりだ…俺っちは好きなだけ扉を壊してもいい事になる。まぁ…俺っちは頭がいいからそんな無駄な事はしねーがな」

と独特の言い回しを言いながら、店主の前に座る。そしていつもの出せ！！と騒いでいる。

これ以上何を言っても無駄だと分かっているのか、扉の事にはそれ以上言及せずに材料を切り始める店主。

慣れた手つきでフライパンを動かしながら、話しかける。

「……それで今度は何を盗みに行くんだ？」

「おう！！これよ」

と一枚の紙っきれを取り出すメリル。それを上から下まで確認する店主。

「…またこんなくだらない物ばかり。まったく残念で仕方ないよ…お前さん程の腕があればどこの盗賊団でも引っ張りだこだろうにな」

といいながら、あっという間にできた麺料理を出す。

「くだらなくなんかねー！！依頼の品だからな！！」

と出された料理を美味しそうに啜っている。

「なぁ…メリル。一回でいいから盗賊団に入ってみたらどうだ？仲間ってもんはなかなかいいもんだぞ。お前さんには分からんだろうがな。本当の意味で心の支えになる事もあるんだぞ？」

「・・・・・」

だが、メリルはそれに応えない。無視しているというより、ただただ食べる事に集中しているようだ。

「今この砂漠には数多くの盗賊団がある。お前さんが気にいる奴らも何人かはいると思うんだがな～～？もしなんなら、俺が紹介してや・・・」

「おかわりだ！！」

と空っぽになった皿を差し出してくるメリル。それを無言で見つめ、やれやれっと手を上げる

「分かったよ好きにするといい……同じのでいいんだな？……そうだ…これは噂なんだがな？ある盗賊団が大きな仕事をするために、いくつもの盗賊団に声をかけ始めてるらしい。何をやるかは知らんがな…」

「俺っちにはそんな事関係ねーー。奴らには美学がないから嫌いだ」

美学ね？っとフライパンを炒める店主。そしてメリルから受け取った紙をふむふむっと見ながら…

「それで……今回はリザードマン族の小城か…まぁ…大丈夫だと思うが一応気をつけろよ？」

「おう！！俺っちに任しとけ！！」

っとメリルは嬉しそうに笑っていた。

依頼（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・意見待ってます。励みになるので

ちょうどいい（前書き）

え〜〜スギ花粉です。楽しんでいただけたら幸いです。ではどうぞ〜〜

ちょうどいい

ザパーン！！ザパーン！！っと崖に波が打ち寄せている。

この崖の上にはちょうどリザードマンの城が建ってるのだ。

そして、その崖をゆっくりとのぼる黒い影がある

「うんしょ……こらしょ……」

９０度の壁を命綱もつけずにどんどん上へ上へと進んでいく。

後少しで頂上というところまでくると、その影は崖の途中に半月刀を突き刺し、片手で掴みながら器用にヒュンヒュンヒュンと鉤づめがついた縄を勢いをつけて投げつける。

キン！！と、それが城の窓に引っかかり、ぐいぐいっとそれを確かめると、するすると登ってしまう。

カチャカチャ・・・・・・カチ・・・・ギ～～～とゆっくりと窓を開け、するりと入り込む。

「・・・・・・キキキキ」

とその影は笑い声を上げると闇へと消えていく。

す～～～～と音もなく、廊下を進み、柱に隠れながらもテンポよく進んでいく。

そしてある部屋の前まで来ると、耳をあて誰もいない事を確かめる。針金のようなものを取り出し、ちょいちょいっと鍵を開けするりと入る。

しばらくゴソゴソっと部屋の中を色々と物色し、そして袋を膨らまし戻ってくる。

「！！！」

バッとその影は跳んで、天井に張りつく。

しばらくすると、前方からリザードマン族の戦士が5人・・・辺りを警戒しながら歩いてくる。その集団は影に気付かずに去って行ってしまう。

「キキキキ・・・・意味ないね～～」

と天井から下りると、また廊下を進んでいく

「え～～～と……後は」

と何やらリストらしき物を広げて見ている。

「ふん…ふん…後は、族長の部屋だから……一番いい部屋か」

う～～ん、う～～んっと唸りながら右左を見て

「こっちだな」

っと自分の感だけと頼りに、ささささっと進んでいく

しばらく城を探索し、それらしい部屋を見つける事ができた。

角からチラっと様子を見る。ひとつの扉の前に屈強なリザードマンが二人・・・凄まじい表情で立っている。

「あそこが、リザードマンの族長の部屋か。見張りは二人……ね？」

腰からキンっと半月刀を取り出し、魔力を込めていく。するとそれが、黒いオーラを纏う。

そして、目を瞑り集中しているようだ。

すると……少しづつ…少しづつメリルの気配が消えていく。

まるで闇に溶け込んでしまったかのようになる。

そしてヒュウっと石つぶてを反対側へと投げる。

コン・カン・コン……と大理石の廊下にあたり音を立てる

それに瞬時に反応するリザードマンの戦士二人。

バッと角から態勢を低くし、目にもとまらぬ速さで一気に間合いを詰めるメリル

ゴンっと手前にいたリザードマンの戦士の後頭部を半月刀の柄の部分で強打する

「が！！」

呻き声をあげて倒れる戦士

「な、何者だ貴様！！」

と振り返ったもう一人の戦士が、いつの間にか目の前に迫っていたメリルに驚き、瞬時に抜剣しようとする。

だが、それをバッと飛び、空中でその剣の柄を上から足で押えてしまう。

「な！！」

っと驚愕の表情を見せたのもつかの間、真横から凄まじい蹴りが飛んできてまともにクリーンヒットする。

メリルは意識のなくなった戦士を足がかかりにして、くるくるくるっと回転しながら見事廊下に着地する

バタっとその戦士は倒れてしまう

「キキキキ……修行が足んないね～～。安心しな……俺っち、今日の盗むもんに命はねーからな」

さてっと、その影は扉を開けるとするりと部屋へとはいっていく。

さすが、族長の部屋だ。これまで入った部屋などより明らかに、豪勢な造りになっている。

誰かに気付かれる前に仕事をしてしまおうっと思った時

「・・・・誰・・・・・だ」

とベットから声をかけられた。かなり驚いた。この状態の自分ならまず気付かれる事などないのだ。

「キキキキ……俺っちの気配に気づくとはね。……俺っちかい？俺っちは砂漠の女盗賊…メリルってんだ！！」

「ハァ・・・・ハァ・・・・盗賊」

「うん？やけに苦しそうだな・・・病気か？？・・・・お前」

「・・・・・・・・・・・」

その男はゆっくりと立とうとしたようだが……がくっとそのまま気絶した。

「あらあら・・・気絶しちゃったよ。ちょうどいいや…仕事…仕事」

フン……フン……っと鼻歌を歌いながらガサガサとそこら中をあさりまくる

「え～～と……おう！！あった…あった。多分これでいいんだよな？キキキキ・・良し、全部そろったかな」

と自分の膨らんだ袋の中身を確認しているようだ

「まぁ……こんなもんだろ。早くしないと気付かれちまうかもしれないしね～。まぁ……俺っちが捕まる訳ないけどな」

そんな独り言をいいながら一旦荷物をおいて部屋を横切り、窓へと向かう。がチャッと窓を開けて持っている鉤づめのついたロープをしっかりと固定しているようだ。

「おし！！出来た、出来た」

とまた荷物のある所まで戻り、よいしょっと担ぐ。

そしてそのまま窓から出て行こうとして……ピタッとその歩みを止めた

「ん??」

とベットで倒れている男に注目する。

そのまましばらくじっと見つめ、う～～～んと何やら考えるメリル。

そしてポンっと手を叩く。

「そうだ！！ちょうどいいや！！」

そういうとベットへ近づき、うんしょっと黒髪の男を担ぎあげる

そして、縄をしっかり掴み……窓から消えていった

ちょうどいい（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・意見待ってます、励みになるので

チャングル山（前書き）

え～～スギ花粉です。楽しんでいただけてるでしょうか？では、どうぞ～～

チャングル山

今…一人のギガン族の老人が祈りをささげている。
部屋にたった一人で、座禅を組み精神集中をしているのだ。
そんな時……その集中を乱す出来事が起きる
ドンドンドンっと扉が叩かれる。
「ラ、ラグナ―様！！」
と一人のギガン族の若者が血相を変えて入ってくる。
それでだいたいの状況を理解する。そもそも神官の祈りを邪魔してまで、呼びだす事など限られてくるのだ
（はぁ～～。またか……メリル。問題ばかり起こしおって）
「……どうした？」
「そ、それが……メリルが帰還したのですが。人間族の男を連れてきています！！ただ今オガン族長が必死に止めておりますが！！」
それを聞き、もう何度ついたか分からないため息を吐く。
「はぁ～～……ワシが行かねばなるまいな」
よっこいしょと、ラグナ―は立ち上がった

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝　　　　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

チャングル山……大陸の南にある大砂漠の中央に位置する山であり、ギガン族たちの聖なる山でもある。

彼らギガン族は、持ち前の強靭な爪で山に穴を掘り、そこを住宅として暮らしているのだ

砂漠にもいくつかの集落があり、そこで暮らしている者たちもいる。だが、砂漠で暮らしていたギガン族たちも、今はチャングル山に集まってきている。とある理由からだ。

そして、そのチャングル山の入り口付近に大勢のギガン族達が詰め寄せている。

「あ！！ラグナー様！！」

と何人かのギガン族が自分に気付き、さっと後ろに退き道をつくる。

そこをゆっくりと進んでいくと、褐色の肌に、珍しい黒の長髪をポニーテールのようにし、それにバンダナを頭に巻いている人間族の女性がオガン族長と何やら言い争いをしているのが見えてきた。

「…メリルや」

「おう！！ラグナ―……俺っちは今戻ったぜい！！」
と気さくに挨拶してくるメリル。この子はいつまでも本当に変わらない。
「き、貴様！！ギガン族の唯一の神官！！ラグナー様を呼び捨てにするなと何度言ったら分かるんだ！！」
と一人のギガン族の男が怒鳴り散らしている。
ギガン族をまとめ上げている１０人の族長の一人……オガンだ。
オガンは、掟などに特に厳しい族長だ。だから、メリルとは特に合わない
「その肩に担いでるのは……何だ？」
とラグナ―はメリルを刺激しないように、話しかける。
「うん？あ、これ？いいだろ～～～……拾ったんだ！！」
と訳の分からない事を言い出すメリル。人間族の男をどうやったら拾えるというのか……だが一々説明を求めていたら話しが進まない。
「……それは人間族の男ではないか。ここはギガン族の聖なる山・・あまりギガン族の者以外を入れる訳にはいかんのだ」
それを聞き、ハァ～～とため息を吐き、やれやれっといった表情をする。

ラグナーは少し嫌な予感がした。

「まったくラグナーは。いいかい？落ちてた物を拾った。さぁ……これは誰の物だ？もちろん拾った奴のもんだ！！つまり……これは誰のもんだ？当然……俺っちのもんだ！！」

「いや……そうではなく」

ラグナーはすでに話しの論点が変わっている事を指摘しようとしたが、メリルは止まらない。

「するってーと何か？俺っちの半月刀はダメなのか？この服は？…おいおい俺っちのもんを盗もうなんてやめといた方がいいぜい！！」

「・・・・・・」

（ダメじゃ…こうなったメリルに話は通じんじゃろ）

どうしたものか……と考えをめぐらすラグナー。

「ラグナー様！！掟を忘れてはなりませんぞ！！人間族の男を入れるなど掟に反します！！」

とオガンが大声を張り上げた時……

「「「メリル姉！！」」」

とギガン族の子供達がわらわらを現れて、メリルを取り囲んでしまう。子供たちには、ギガン族の神官も族長も目に入らないようだ。

「おう！！ガキんちょ共！！」

とメリルが寄ってきた子供の頭をワシワシっとなでている。

「ねぇ～ねぇ～本当に盗ってきてくれたの！！」「早く見せてよ！！」

「当然よ！！俺っちは砂漠の女盗賊…メリルだ！！俺っちに盗めねー物なんてねーー！！」

というと、ごそごそを袋をかき回し始める

「えっと……リザードマンの族長の眼鏡だろ？後……貴族のスプーンとナイフとフォークだ！！

ほれ見ろ！！俺っちの言った通りだろ？金持ちでも、全部金ぴかになんかしてねーんだ！！他にも色々あるぞ～～～。だけどな……

今日の目玉はこいつだ！！」

と担いだ男をポンポンと軽く叩く

「？？？・・人間族の……男？」

「見ろ！！この黒髪を！！お前らの魔王ごっこにうってつけって訳だ！！女の俺っちよりもいいだろ？」

子供達はその人物をジロジロっと興味深そうに見ている

そしてメリルは何かを思い出し、大きな袋から小さな袋を取り出す。

「おう！！そうだ！！ラグナー！！これはついでだ……受け取れ！！」

と袋を投げつける。それを手に取るラグナー。ズシっと重みを感じた

それを開けてみる……そこには大小様々な宝石が入っていた。

「…いつもすまんな…メリル」

「キキキキキキ……まぁ…ついでだ」

メリルはいつものように笑っている。

ラグナーはその袋をオガンに手渡す。

それをオガンはしっかりと受け取り、メリルに頭を下げている。この族長はただ掟を盲目的に守るような男ではない。しっかりと現実も見据えているのだ。

その時、メリルの周りにいた一人の子供がある事に気付く

「ねぇ……メリル姉。この人、何かぐったりしてるよ？」

「うん？そうなんだよ……拾ってからずっとこんな感じなんだよな～」

とメリルは担いでいた男を下ろし、ぺちぺちっと頬を叩く。

「おい！！起きろ～～！！」

ぺちぺちぺちぺち……略……ビタンビタンビタン！！……と途中から明らかなピンタの域にまで達していたが一向に起きる気配がない。

それを不審に思ったラグナーが近づき様子をみてみる…そして

「こ、これは！！オウロ熱じゃ！！メリル早く下ろしなさい！！このままでは、死んでしまう！！」

「何！！それはやばいな！！」

とメリルはその男を担いで自分の部屋がある方へと走っていってしまう

パッと下げていた頭を上げるオガン

「こら、メリル！！話しはまだ終わっとらんぞ！！」

とオガンが叫んでいるが、メリルは振り返りもせずに走り去ってしまう。

入口付近に集まっていた他のギガン族たちは

「どうなったんだ？」「病か？」「そうらしいな」「じゃあ……問題ないよな？」「あれが……メリルか」

しばらくガヤガヤと話声などが聞こえていたが、一人また一人とチャングル山へと戻っていった。

「……オガンや」

ラグナーはいつものように眉間に皺を寄せているオガン族長に話しかける。

「分かっております……病という事であれば問題はありません。病魔は我らが神の敵ですので、治療という形をとれば掟に反する事にはなりません。ですがそれが治ったら、一応審問をおこないこのチャングル山から出て行ってもらわねばなりません」

ふむっと腕を組むラグナー。

「仕方がなかろう…それも掟じゃ。それで……食糧の件はどうなっておる？」

「はい…メリルが帰ってきてくれて助かりました。もう少しで食糧が底をつく所でしたので」

「……少しずつ辛くなってきておるの」

「はい……ですが仕方がありません。どうしようもなくなった時は、それが審判の日という事です」

「・・・・・」

ラグナーはそれを聞き、辛そうに目を閉じる。しばらく二人はそこに佇んでいたようだが、

「では、私は食糧の調達と例の件の会議がありますので」

「うむ。ワシはあの青年の様子を診てみるとしようかの」

と二人は別々の方向に歩いて行った

チャングル山（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・ご意見待ってます。励みになります。

誰だ（前書き）

え～～スギ花粉です。楽しんでいただけたら幸いです。ではどうぞ～～

誰だ

……ひどく………熱い……頭が割れるように痛い

喉が渇く………水が欲しい

「・…・………水…………を」

「ほいよ」

と口にお椀をあてられる。それをごくごくと飲み干す

「・・・あり・・・がとう」

「いいってことよ」

そのまま………俺は深い眠りに落ちていった

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝　　　　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

眩しい光が、チカチカと目に入る

「う、うん?」

そして、ゆっくりと目を開く

最初に目に飛び込んできたのは岩だった。むくっと起き上がる。
そこはまるで洞窟のようだ…けどベットもあるし、家具もある。
「・・・・・・・・・・・・」
しばらく……ぼ～～と辺りを見渡す
さらに起き上がろうとして・・・ギン！！・・・と何かに引っ張られた
そして気付く……自分の腕に太い鎖がついているのだ
「…これは？」
ギン…ギン…と引っ張ってみる。ある一定の長さがあり、部屋の中を歩けるようにはなっているらしい。
その時、扉がパンっと開く。
「おう！！起きたか？」
と、ずんずんと一人の女性が近づいてくる。
褐色の肌に、長い黒髪を後ろで縛りポニーテールのようにしている。
そして……自分の額に手をあててくる。
「う～～～ん……うん！！熱は下がったようだな」

「・・・・・・・・」

（この人は……誰だろ？）

自分は黙ってその人物を見つめていたが…

「おいおい……命の恩人にお礼はねーーのかよ！！」と言われた

「え？命の・・・・恩人？」

「そうともさ！！俺っちが病気で苦しんでるお前に、水とか飲ませてたんだ・・つまり俺っちが助けたんだ！！」

さらにズイッと自分に顔を近づけてくる女性。俺は咄嗟に少しだけ後ろに体を反らす

「あ、ありがとう」

「どういたしまして・・・キキキキキ」

と可笑しそうに笑っている。すごくきれいな人だ。特に笑顔がよく似合う

「それで…あの……あなたは誰なんですか？」

「うん？ハァーー…一回言ったじゃね～～か～。俺っちは砂漠の女盗賊……メリルってんだよ！！」

「……メリル……え？聞いた？」

「そうさ！！まったく忘れちまうなんて馬鹿なんだな」

と馬鹿にしたように怒られた。どこでだろうか……まったく思いだせない

「……あの～～メリルさん？」

「メリルでいいぞ。さんづけなんて気持ち悪い」

「……じゃあ…メリル？この鎖、何？」

と自分の腕に巻きついている太い鎖を指さす

「うん？……それは逃がさないようにだよ。お前は俺っちの召使いだからな」

「は？召使い？」

まったく状況が理解できずに、頭の上にクエスチョンマークを浮かべる

「そうさ。お前は瀕死の病気だった…それを俺っちが発見した…そして水を飲まして直した。だから俺っちはお前の命の恩人だ。つまり、お前は俺っちのために生きないといけない！！だから、召使いだ！！俺っちは家事とか嫌いなんだ…だから全部お前がやるんだぞ！！」

と自分の方を指さす

（な、何か理不尽な要求をされてるような気がする）

そんなカイをよそにメリルと名乗ったその女性は、何かを思い出したかのようにポンっと手を叩く。

「そうだ！！お前…名前は？」

「え？知らないの？」

「俺っちが、知ってるわけないだろ？おいおい何言ってんだよ」

やれやれと呆れたように両手を上げるメリル

（い、いや…一度会ってるんだよね？）

何だか会話がかみ合ってないような気がしながら、口を開けて喋ろうとして、ピタッと一瞬だけ止まる。

そして・・・・・・・・・・・

「――――――――――――俺は――――――――――――――

――――カイだ」

と言った

「そうか！！カイか…ふ〜〜〜ん。どっかで聞いた名前だな？」

「・・・・・・」

「なぁ…腹減ってるか？」

するとぐ〜〜っと自分のお腹が鳴った。それを聞き可笑しそうに笑うメリル

「キキキキ…体は正直だな！！まぁ・・病み上がりだし。仕事とかは明日からでいいぞ。ちょっと待ってろ…なんか食べ物持ってきてやるからな！！」

バッとベットから華麗に飛びおりると、メリルはバタバタと部屋から出て行った

その扉の方をじっと見つめているカイ

そして――――――――――次に自分の右手を頭にもってくる

「そうだ――――――――――俺は――――――――――カイだ

カイとは――――――――――誰だ？」

誰だ（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・意見待ってます

どうしても（前書き）

え～～スギ花粉です。楽しんでいただけてるでしょうか？毎日の投稿は少しきついですね。感想・意見ありましたら。励みになるので。

どうしても

「記憶が・・・ない？」

「……うん」

カイは床に腰を下ろして、俯いている

メリルは今までカイが寝ていた自分のベットで胡坐をかき、頬杖をついている。食べ物をもって戻ってきたメリルにカイは自分の今の状態を説明しているのだ。

「自分が、カイって名前だったのは覚えてる。けど、それ以外はさっぱりだ」

気付いたら、そこのベットで寝てて……メリルが現れたのだ

「あ～～～俺っちも経験があるぜ。オウロ熱は小さい頃にみんなかかるんだ。カイぐらいの歳でかかるなんて珍しいんだぞ？そんでな…すげー熱だろ？だから一時的に記憶が飛ぶことがあるらしいんだ。安心しな。記憶が戻らなかったなんて聞いた事ね～～。何かのきっかけで戻るってもんだ」

はむはむっと持ってきたパンを食べながら、答えるメリル。明らかにカイの分のパンも胃袋へと入れているが、そんな事に構っていられない。

それを聞いて、少し安心したが……やっぱり不安な事には違いない

「ねえ…俺は何者なんだ？……メリルなら分かるんじゃないか？」

「キキキキ……確かに見当がつかない訳じゃね～な～」

「ほ、本当？？」

とメリルに詰め寄るカイ。自分の事に繋がる情報があるなら、どんなものでも欲しい。

それを手で制すメリル。

「まぁ～まぁ～。落ちつきなよ……っと！！」

といいながら、メリルが殴りかかってきた。凄まじい速度の手刀がカイに迫る

「！！！」

それを瞬時に腕でガードし、バッと後ろに跳び間合いをとる。だがギンっと鎖に引っ張られ、たたらをふむ。

メリルは、ふむふむっと何やら確認しているようだ。

「やっぱりな。カイ…お前には武術の心得がある。しかもだ、無意識のうちに身体向上の魔法まで使ってる。そんなお前が一般人だなんてありえねー」

「俺が？？」

「ああ……俺っちには分かっちまうのさ。う～～ん……なぁカイの魔法を見せてくれよ」

「えっと……魔法は……多分こんな感じでいいのかな？」

カイは自分の右手を見つめて、体の中にあるであろう魔力を右手に集めるようなイメージする。

すると……ボっと黒いオーラの球体が浮かび上がる。

できたっと安堵するカイの横では、それを見たメリルがピョンピョンっと驚いたように飛び跳ねている

「すげー！！闇の魔法だ！！」

「え？それは凄いの？」

「闇は凄く珍しいんだ！！俺っちも母ちゃん以外で初めて見た！！」

へぇ～～っと感心しながら自分が浮かべている球体を見つめるカイ。

メリルはピンっと何かを閃き、キキキキと不敵な笑いをもらす。

「……おいおい……俺っちはやっぱり頭の回転が速えーや。もうお前の正体をわかっちまったんだからな」

「何だって！！お、俺は誰なんだ！！」

それを聞き、ベットの上に立ち上がりふんっと胸を張るメリル。

「キキキキ……俺っちがカイを助けた時の状況…武術の心得…そしてこの無数に持っていた針。これらを総合的に考えれば答えは一つしかない！！」

ゴクっと固唾をのんで聞いているカイ。

そして――――――――――――――――――――

「お前は……盗賊だ！！」とビシっとカイを指さす

「と、盗賊??」

カイは予想外の答えに少し戸惑っている。だがそんなカイにお構いなく喋り続けるメリル

「そうさ！！いいか？お前はあのリザードマン族の小城へと盗みに入った・・・だけど馬鹿だから捕まっちまった。そして牢屋に入れようとしたら、発病した。他の囚人にうつす訳にはいかねーから、あの部屋で寝てた。だから逃げ出さないように、警備の者をつけていたって訳さ！！」

「・・・・・・・」

（つ、捕まってた？……じゃあ本当に俺は盗賊だったのか。なるほど…それなら武術心得があったり、魔法をつかえたりするのも頷ける。そうか……うん？…じゃあ）

「じゃ…メリルは俺を病気の時と、そのリザードマン族の城の時と二度も助けてくれたって事？」

「キキキキ……そうなるな」

それを聞き目から涙がこぼれそうになった。メリルが助けてくれなければ、盗賊として縛り首になってもおかしくないはずだ。

「ありがとう……本当にありがとう」

「よせやい！！……照れるじゃねーか！！」

と嬉しそうにしている。そして何かを思い出す。

「おう…そうだ！！後な？お前の名前はカイじゃねーー」

「え？いや…でも」

「まぁ……待ちな。いいか？カイ・リョウザンってのは最近誕生した魔王の名前だ。そしてお前は盗賊として偽名を使っていた。それしか覚えてね――って訳さ。」

「……じゃあ…俺は名前すら覚えてなかったのか」

「キキキキ…まぁ…めんどーだからカイって呼ぶぞ」

「うん……分かった」

「そうか…お前は盗賊だったって訳か……う～～～～ん」

とメリルは腕を組んで何かを考えている。そしてチラっとカイを確認するメリル。

（…ふんふん…盗賊で…俺っちと同じ黒髪で……母ちゃんと同じ闇の魔力……それに俺っちはこいつが気に入ったしな……うん！！決めたぜ！！）

「な、なぁ……カイ」

とメリルがもじもじと恥ずかしそうにしている。

「何？」

「その…だな……あ～～～お前がどうしてもっていうんならな？…俺っちの子分にしてやってもいいぞ？」

「子分？」

「そうさ！！俺っちは凄腕の盗賊なんだ！！だからなお前に色々教えられるぞ！！」

ピョンっとベッドから飛び降りると、しゃがみ込んでカイと同じ目線になるメリル。

「……子分…それになると俺はどうなるの？とりあえず鎖は外してもらえるの？」

と自分の腕についた鎖を見せるカイ。メリルはやれやれだっと呆れた表情をする。

「ハァ…カイは馬鹿だな。鎖をしてる子分なんかいる訳ないだろ？もちろん……子分なんだから家事もするんだ！！そして…俺っちの

事を影から支えるんだよ！！」

「……影から支える」

（どうしてだろう……何だかやけに心がざわつく）

カイは自分でも分からない…もやもやを感じていた。だが、それが何なのか思い出すことができない。

「なぁ…どうすんだ？」

と少し不安そうにしているメリル。カイは少し考えてみた。

（……正直な話…俺にはメリル以外に頼れる人がいないし、盗賊としても未熟らしいから色々と教えてもらえるのはありがたい。今までの自分と似たようなことをしてれば記憶が蘇るかもしれないし。それに……それに、何だかメリルを見てると少し懐かしく感じるんだよね～～）

うんっと自分なりの答えを出すカイ。そしてメリルをじっと見る。

「……俺はまだまだ未熟かもしれないけど、メリルの子分として一生懸命頑張りたいと思う。よろしくお願いします！！」

と頭を下げ、手を差し出した。それを見てパーと不安な表情を吹き飛ばし、満面の笑みを浮かべるメリル

「本当か！！キキキキ……子分か……えへへへへ……じゃあ俺っちがカイの親分だ！！」

二人は手を出し合って、ギュッと握りあった。

どうしても（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・意見待ってます。励みになるので。

会議（前書き）

え～～楽しんでいただけてるでしょうか？スギ花粉です。ではどうぞ～～

会議

そこは大きな広間だった。山を削りだして作った部屋であるため、壁はすべて岩だ。床には白い大理石のようなものが敷き詰められている。

そして、この部屋には天井がなかった。大きな穴があいており、そこから太陽の光がふりそそいでいる

（雨の時とかはどうするのだろうか？）

カイはオガンと呼ばれていた族長に連れられて、その部屋へと入り中央に座らされた

オガン族長はカイを案内した後、カイから見て左側の列に加わった。左右に5人ずつ、茶色いローブを着ているギガン族の男たちが座っている。ここに来るまでの間、様々なギガン族のものを見たがみな黒いローブを着ていた。

彼らは族長なのだろう……地位によって違う色のローブを着ているということが想像できた

そして正面には、一人のギガン族の老人がいた。赤黒い肌に、すこし長い爪をし、白く長い髭をたくわえている。そして、その者は紫色のローブを着ている。

（な、何か緊張してきた……審問って何聞かれるんだろう？）

メリルに審問があるという事は聞いていた、けど…今の状態を信じ

てもらえるのか自信がない。

カイが不安がっていると

「ではこれより、会議を行う！！」

と一人の族長が宣言した。

ドンっと１０人の族長たちが、拳で床を叩く。そして自分の前に座っている老人が話しかけてくる。

「初めましてじゃの…人間族の青年よ。ワシはギガン族の神官…ラグナーじゃ。まぁ…そんなに緊張せんでもよい、何もとって喰おうなどと考えとらんよ。ワシらギガン族は他の種族とあまり交流をもたんから不安になるのも分かるがの……いくつかの質問に素直に答えてくれればよいのじゃ。ふむ……では青年、ワシの問いに対して嘘偽りなく答えると誓えるかの？」

「は、はい」

とカイは少し上ずった声で答えた。

「では……お前さんの名前は？」

「自分は……カイ……だと思います」

じっとカイを見つめるラグナー。なぜか落ち着かない。自分が見透かされているような気がするのだ。

「思う？ふ～～む……ではどこから来たのじゃ？」

「……わかりません」

「メリルとはどこで知り合った？」

「……それも分かりません」

「貴様！！ふざけているのか！！」と右側に座っていた族長がいきり立つ。

カイは一瞬びくっと反応する。

だが……

「カシム族長…黙っていろ。今はラグナー様が審問をしておられるのだ」

とオガン族長が腕を組んだまま、睨みつける。それを聞き、カシム族長は不服そうにストンっと座りなおした。ギガン族の年齢はよく分からないが、カシム族長は他の族長に比べて少し若いような印象を受けた

「さて……カイとやら。なぜ答えないのじゃ？」

「自分には……記憶がないのです」

それを聞き、場が一瞬ざわつく。そんな中ラグナーはカイの目をじっと見つめている。

そしてふ～～～むっと腕を組む、ラグナー。

「さて……これは少し難しい問題かもしれんの。病であるものは、治療の間このチャングル山に滞在することは許される。このカイという青年はここに来た時確かにオウロ熱にかかっておった。それはワシが断言できる。そして、今この者が嘘をついていない事もこのラグナーが断言しよう」

それを聞いて、少し驚いたような表情をみせるカイ

「ほっほっほっほ。ギガン族の神官に選ばれる者には特別な力があるのじゃよ…真実を見抜く力がな。さて……記憶喪失とでも言えばいいのか。これを病と考えるべきなのか……難しい問題じゃ。族長たちにはここを踏まえて決断を下してもらわねばなるま…」

とラグナーが言い終わる寸前……ドンドンドンドン！！っと凄まじい力で扉をたたく音が部屋に響いた。

他の族長たちがその音に驚いている中、オガン族長が凄まじい形相で立ち上がると入口へと近づいていき、ギ～～～～っと扉をあける。

そこには、褐色の肌に、長い黒髪をポニーテールのようにした人間族の女性。メリルがいた。

「……メリル…貴様何の用だ。族長の会議を何だと思っているのだ？」

凄まじい殺気を放っているが、当のメリルは飄々としたものだ

「おう！！オガン！！あのな……言い忘れたんだけどよ、カイは今日から俺っちの子分になったから！！」

「……だからなんだ？」

やれやれっと両手を呆れたようにあげるメリル。

「ここまで言っても分かんないのかよ！！だ～～か～～ら～～、子分と親分はいつも一緒にいなくちゃいけないんだ！！」

「ほう……だからこの青年をチャングル山に滞在させろ……とでも言いたいのか？」

「おう！！」

オガンは、プルプルっと体を小刻みに動かしたかと思うと大きく息を吸い込み

「この……たわけが！！」

と一喝した。メリルは慣れたものなのか、息を吸い込んだ時にはすでに耳を手でふさいでいた。

「これは我らギガン族の会議で決めるべきことだ！！お前には関係ない！！さっさと部屋に戻っていろ！！」

するとメリルは不服そうに、う～～っと唸ってからアッカンベーをして去って行った。

オガンは、まったくと言いながら扉を閉めて自分の席へと戻る。

「な、なぁ……オガン族長」

「何かな…カシム族長」

「い、今の話からするとこの青年がいなくなれば、メリルはこのチャングル山から出ていくという事になるのではないか？」

それに対して、オガン族長は底冷えのするような声でいう

「……だったらどうしたというのだ？今問題となっているのは、この青年の状態を病魔の仕業と考えるかどうかだ。それに、メリルはいつこのチャングル山を出て行ってもいいという事になっているはず」

「そ、それはそうだが」

となぜか言い淀んでいるカシム族長。何人かの族長もひそひそっと何かを話している。

「ラグナー様……我らには他に話し合わねばならない案件があります。長々とこの事について時間を割く訳にはまいりません。さっそくですが決を採ってきただきたいと思います」

ラグナーは左右の族長たちの様子を窺い、決断する。

「うむ……ではみなに問う。人間族の青年……カイ。この者のチャングル山への逗留を許可すべしと思うものは！！」

ドンドンドン……っとカシム族長を含めた7人の族長が床を叩く。

「では……許可すべきでないと思うものは！！」

ドンドン…っとオガン族長を含む3人の族長が床を叩く。

「……相分かった。これは族長の会議で決まったことじゃ。カイ……お前の記憶が戻るその時まで、このチャングル山への逗留を認めよう！！カイ…後でワシの部屋に来なさい。いろいろと知っておいておかねばならぬ事があるでな」

ラグナ―様はにっこりと笑った

こうして……俺のチャングル山への逗留が許され、盗賊としての生活が幕をあけた。

会議（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・ご意見まってます。励みになるので

ギガン族（前書き）

え～～スギ花粉です。楽しんでいただけてるでしょうか？ではどうぞ～～

ギガン族

「だ～か～ら～…そうじゃないって言ってるだろ！！カイ～～」

「わ、分かんないよ！！メリル！！」

チャングル山への逗留が許されてからすでに1週間がたっていた。

そして今、メリルの部屋でカイが悲鳴を上げている。

「何でだよ！！いいか……もう一回よく見てろよ！！」

とメリルがカイが持っている錠前を取り上げる。そして懐から針金のようなものを取り出す。

そしてスッと入れて、カチャカチャっといじくりまわす。

「こうして…ああして…そうして…ほい！！」

カチっと錠前があく。まさに神業としかいいようがない速度だ。

「どうだ！！さぁ…やってみろ！！」

カチっとまた鉤をしめてズイっと差し出す。だが、まったく分からない。

「ち、ちゃんと教えてよメリル！！」

やれやれっと呆れたように両手を上げるメリル。

「教えてるだろ～～カイ～～。だから…こうして…ああして…」

「分からないよ！！」

数時間前から、盗賊の基本である錠前破りを習っているのだが、まったく要領を得ない。メリルの教え方が感覚的すぎるのだ。

「何でだよカイ～～！！ハァ～～気配を殺す術なんかは俺っちが教えなくてもできたじゃね～かよ～」

「そ、それはそうなんだけど」

数日前からメリルと盗賊の特訓が始まっていた。そこから自分について色々な事が分かった。

まず、確かに自分には武術の心得があるという事だ。それを実感したのはメリルと組み手をしてみた時だった。

自分は覚えていないはずなのに、まるで体がそれを知ってるかのように勝手に動くのだ。

武器も扱ってみたが素手のほうがしっくりくる。おそらく体術専門だったのだろう

また、メリルから気配を殺す術を学んだ時も、それほど時間をかけずにできるようになった。

メリルも凄く褒めてくれた。だけど、試しにメリルの手本を見せてもらった時は驚いた。目の前にいるのに、いないような気がした程

だったのだ。

まぁ…メリルと比べるのは酷というものだろう。しかし結構自分も優秀だったのではないか？……などと自惚れていた。

だが……錠前破りが絶望的だった。何となく自分が捕まった理由が分かった気がした。というより錠前が破れないのに盗みに入るとは自分は何を考えていたんだろうか？

「いいか…カイ。苦手な事から逃げちゃいけねーんだ！！」

「いや…そうじゃなくて、もう少し分かりやすく…」

だが、カイの懇願をまったく聞かずに喋り続けるメリル。

「俺っちだってな……最初から出来た訳じゃねーんだ！！何度も何度も練習したんだ！！だからな？カイ……諦めちゃだめだ！！」

「・・・・・・」

（ハァー……こうなったメリルには、何を言っても無駄か）

数日、メリルの子分として一緒に生活してみて、カイはメリルがかなり変わっているという事を感じ始めていた

彼女なりの筋道とでもいうものがあるらしく、そういう時に相手が理屈をこねるような事をメリルは一番嫌う。

だからカイはそこは黙って聞いていて、少し時間がたってから軌道修正するという方法をとる事にした。時間がたつとメリルの考えが

変わっていたりするのだ。
その結果、ギガン族たちはメリルに用事があるときは、まずカイに頼むようになっていた。なぜかカイのいうことには、メリルが理解を示すということに気付き始めたためだ。

カチャカチャっと錠前をいじくっていたカイであったが、ある事を思い出す。

「あ！！ゴメン…メリル！！今日ラグナー様から部屋に来るように言われてたんだった」

「あん？…う～～～ん…仕方がね～な～カイは。じゃ今日はここまでだ。俺っちは腹が減ってるから早く帰ってこいよ…そして食事を作るんだぞ！！お前の料理の腕は最高だからな！！」

そこまで褒められると自分としても悪い気はしない

「うん。分かった」

メリルはそのまま自分の部屋のベットに横になり、カイはラグナーの元へと向かった

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝　　　　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝

コンコンっと扉を叩く。

「すいません……カイです」

すると、中からラグナーの声が聞こえてくる

「おう……カイか。ふむ……入ってきなさい」

「失礼します」

とカイは部屋の中に入った。その部屋はかなり狭い部屋だった。家具もなにもなく、メリルの部屋よりも質素だ。もっと豪勢な部屋を想像していたカイは少し驚いた。

その部屋の中央で座禅を組んでいたラグナー様は、こちらに向き直る。

ギガン族には掟があり、このチャングル山に逗留するうえでは守らねばならない事がある。その他にも様々な事について学んでいるのだ。

「ふむ…カイどうだ？記憶は戻ったか？」

「いえ…それがまだ」

カイの顔に少し陰りがさす。

「……そうか。まぁ…焦ることはない。ゆっくりと思いだすといい……それでメリルとの生活はどうじゃ？根は素直でやさしい娘なのじゃが……メリルは少々変わっておるからの～。大変なのではな

いか？」

それに、苦笑するしかないカイ。

「まぁ……時々困ることもありますが、今の所大丈夫です。メリルは盗賊としての自分に色々と教えてくれますし、感謝しています。それに……メリルの奔放さをみてると、何か懐かしいような気持ちになるんです。依然どこかで会ったような、よく分からないのですが何かを思い出しそうになるのです」

「・・・・・」

（ワシはどうもこの青年が盗賊には見えんのじゃが……特にメリルが断言しているという点がワシの不安をさらに掻き立てる。）

そんな事を考えていたラグナ―であったが、今考えても答えでないと結論づけ。カイに話しかける。

「さて…カイ。今日はギガン族について話そうか。お前さんは、ワシらギガン族についてどれだけ知っておるかの？」

「え～～～と……すいません。まったく知らないのです」

と少し申し訳なさそうなカイ。

「ふむ……それも仕方があるまいよ。我らは排他的な種族じゃからな。さて……ではまずギガン族について軽く説明しておくかの」

「お願いします」

ラグナーは腕を組んで語り始める。

「ワシらギガン族は砂漠の民じゃ。太古の昔からこの地で暮らしておる。そしてギガン神を信仰する唯一の種族でもある。

ワシらの神は厳しい神なのだ。ワシらをこの砂漠から一生出ることができぬようにお創りになった。この赤黒い肌を見なさい。何人ものギガン族が砂漠から出ようと試みた。だが、他の環境では1カ月もせぬうちに死んでしまうのだ。この灼熱の大地から逃れられぬ運命なのだよ

さらにじゃ……ワシらは魔法というものが使えぬのじゃ。その代わりといってはなんじゃが強靭な爪と肉体を兼ね備えておるがの。

寿命も人間族に比べればはるかに長い、その間ずっと砂漠と戦い続けなくてはならぬ。残酷じゃとは思わんか？辛くても逃げる事は許されぬ。ここで誇り高く生きるしかないのだ

そしていつしか……ギガン族には滅びの時が訪れるといわれておるだが、もしワシらが掟を守り誇り高く生きたなら神は助かる道を用意して下さる。

それが神託じゃ。

それを神より受ける役目を負ったもの……それが神官なのじゃ。長い年月……多くの神官がいたが神託を受けたものはいない。だが・・それでいいのだ。神託を受けるという事は滅びの試練を受けるという事じゃからな」

「でも……確か掟では、他の種族をこの聖なる山に入れてはいけないはずですよね？自分のせいで掟を破る事になるんじゃないですか？」

それを聞き、にっこりと笑うラグナ―。

「安心しなさい……病であれば話しは別なのだ。病魔はギガンの神の敵である悪魔の化身とされておるのじゃ。じゃから、その悪魔を退治する行為……つまり治療じゃが……は例外的に許される。そしてカイの記憶喪失は、族長の会議で病魔の仕業と決まった。だから掟を破ることにはならん」

そうですかっと安堵の表情を浮かべるカイ……だがある疑問を抱く

「え？……じゃあ、メリルも何か病を患っているんですか？すごく元気そうに見えるんですけど」

それを聞き、少し困ったような表情を見せるラグナ―。

「……メリルは病を患ってはおらんよ。確かにこれは掟を破っている形になっておる。それは間違いない。じゃが、これにはワシらの事情も絡んでくるでな……さてどこから話せばよいのか」

っとラグナ―がその白い顎鬚をなでる。

ふむっとラグナ―が考えを纏め、話しだそうとした時……

ドンドンっと扉が叩かれ、バンっと乱暴に開けられた。

そこにいたのはメリルだった。

「カイ！！もう我慢できねー！！俺っちはお腹が減ったんだ！！早く作れ！！」

「い、いや…部屋を出てから、全然時間たってないんだけど……」

ラグナーが許可してないなにもかかわらず部屋に入り、カイの肩をつかんで早くしろ～っとガクガク揺らすメリル

そんな二人を可笑しそうの見守るラグナー

「ほっほっほっほ。まぁ…メリルにかかればギガン族の神官もかたなしじゃ。カイ…行ってやりなさい。この話しの続きはまた今度じゃ」

「はい……分かりました」

それを聞きメリルが嬉しそうにカイの腕を掴んで部屋の外に連れ出してしまう。カイは引きずられるように出て行った

先ほどまでとはうってかわり部屋には静寂が訪れる、

そして……

「……メリルは本当に楽しそうじゃな。同じ人間族としてだけでなく、互いに気を許しているようじゃし……よい傾向じゃ。メリターザが望んだように、メリルがこのチャングル山から出ていくきっかけとなってくれるやもしれん」

ラグナ―が少し寂しそうに入口の方を見つめてから、神に祈りをさ
さげるために静かに座禅を組んだ

ギガン族（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・ご意見待ってます。励みになるので

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0274k/

王たちの宴　　Ｆourth　盗賊王編

2010年10月10日21時27分発行